ネイチャー・アンド・ソサエティ研究　第３巻

身体と生存の文化生態

編　　集

池口明子・佐藤廉也

エチオピア南西部、焼畑集落で、薪を手に森から帰ってきた少年たち。背後には*Cordia africana*の幹をくりぬいて製作中の蜂蜜採集の巣箱がみえる。（佐藤廉也 撮影）

海青社

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ（全５巻）

第１巻	自然と人間の環境史	宮本真二（岡山理科大学）、野中健一（立教大学）編
第２巻	生き物文化の地理学	池谷和信（国立民族学博物館）編
第３巻	身体と生存の文化生態	池口明子（横浜国立大学）、佐藤廉也（九州大学）編
第４巻	資源と生業の地理学	横山　智（名古屋大学）編
第５巻	自然の社会地理	淺野敏久（広島大学）、中島弘二（金沢大学）編

第３巻 執筆者（50音順、＊は編者）

池口 明子＊（IKEGUCHI Akiko）…… 序章、第10章
横浜国立大学教育人間科学部 准教授

稲岡　司（INAOKA Tsukasa）…… 第4章
佐賀大学農学部 教授

江上 幹幸（EGAMI Tomoko）…… 第2章
沖縄国際大学総合文化学部 教授

小谷 真吾（ODANI Shingo）…… 第11章
千葉大学文学部 准教授

小野 映介（ONO Eisuke）…… 第1章
新潟大学教育学部 准教授

遠城 明雄（ONJO Akio）…… 第3章
九州大学大学院人文科学研究院 教授

坂本 龍太（SAKAMOTO Ryota）…… 第5章
京都大学白眉センター 特定助教

佐藤 廉也＊（SATO Ren'ya）…… 序章、第7章
九州大学大学院比較社会文化研究院 准教授

高田　明（TAKADA Akira）…… 第8章
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

中臺 由佳里（NAKADAI Yukari）…… 第12章
東京女子大学 非常勤講師

夏原 和美（NATSUHARA Kazumi）…… 第1章
日本赤十字秋田看護大学看護学部 教授

野中 健一（NONAKA Kenichi）…… 第1章
立教大学文学部 教授

堀井 聡子（HORII Satoko）…… 第9章
国立保健医療科学院国際協力研究部 主任研究官

村山 伸子（MURAYAMA Nobuko）…… 第1章
新潟県立大学人間生活学部 教授

米元 史織（YONEMOTO Shiori）…… 第6章
九州大学大学院比較社会文化学府 博士課程

カバー（背景）／**玉本奈々**（TAMAMOTO Nana）　内面世界を布、色彩で表現する造形作家。主な受賞歴にフランス共和国名誉賞2003／新人賞2004／栄誉賞2005・6、個展に「玉本奈々の世界」（富山県相倉合掌造り集落、2007）、グループ展に「現代美術の展望VOCA展」（上野の森美術館、2004）、著書に「マスクの旅路」（文芸社、2009）などがある。富山県出身、大阪府在住。

シリーズ刊行趣旨

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」は、自然災害への備えと対応、環境と開発、人口増加と食糧、持続的な資源利用、環境変化と生存などの世界が抱えているさまざまな問題の把握と解決に関心を寄せている。このためには、地理学が持っている自然と社会との総合性を追及することが不可欠であろう。これらの背景のもと、本シリーズの編者らが発起人となり2007年に日本地理学会に「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ」が設立された。2000年以降に、生き物や環境問題などを対象とする若手の地理学研究者が多くなったこともその機運となった。最近の地理学界では、対象とする地域や生業を超えて、人間―自然の相互関係をめぐる対話が活発になっている。グループでは発表や議論を通じてこうした話題や研究成果を蓄積してきた。

この成果をふまえ、本「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズは、地球上の各地に生きる人々が形成してきた人間―自然の相互関係を総合的に解明することを目的とし、『自然と人間の環境史』、『生き物文化の地理学』、『身体と生存の文化生態』、『資源と生業の地理学』、『自然の社会地理』の5巻で構成している。地理学を中心に、地域研究、人類学、社会学、農学、林学などを専門とする多分野の研究者が最新の知見をもとに執筆している。

本シリーズの刊行を契機に、従来の学問の枠を超え、人間―自然の相互関係を研究することの大切さと楽しさをアピールし、ネイチャー・アンド・ソサエティ研究をみなさんと共に発展させていくことができれば望外の喜びである。

「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究」シリーズ編者一同

（編者を代表して：横山　智）

はじめに

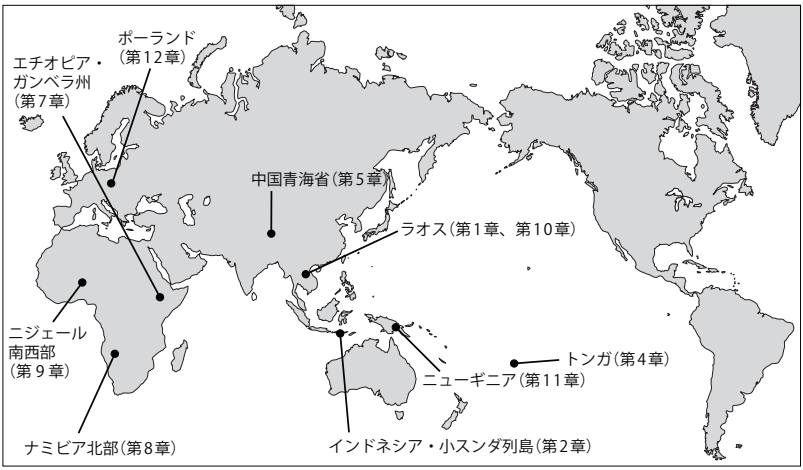
なぜ世界には様々な人の生きざまがみられるのか、という問いは、地理学や人類学をはじめとする人文社会科学の基本的な問いである。本書は人の様々な生活の側面のうち、食や健康、出産や子育て、家族形成といった、きわめて身近な現象の多様性について、理解する方法を考えようとするものである。環境問題や食糧危機、人口変動への対応は現代社会に共有される課題であるが、それらの問題解決には人の健康や生存の地域的多様性への理解が欠かせない。本書では生物としてのヒトと、文化を持つ人という2つの側面を意識しながら、これらの課題に迫ってみたい。

本書の構成と概要は次のとおりである。第Ⅰ部「食と生存」では、人の栄養摂取や食の分配・再分配といった栄養と食にかかわる問題を扱う。このうち第1章「自然を取り込む：日誌法によるラオス3地域の野生食物摂取の比較」(野中ほか)ではラオスの3つの村落を比較し、野生生物資源が栄養摂取に果たす役割を検討する。とくに、これまで重視されてきた糖分やタンパク質などのエネルギー源だけではなく、鉄などの微量栄養素の摂取を視野に入れてミクロな環境利用との関係を考察している。続く2つの章は、いずれも食と身体を形成する社会に目を向ける論考である。第2章「インドネシア、ラマレラのクジラをめぐる交換経済と食文化」(江上)は、地球最大の哺乳類である鯨類に生活を依存するインドネシア・ラマレラ村における鯨肉の交換経済をテーマとしている。一見不安定にみえる捕鯨という生存戦略が、厳格なルールに基づく村落内の分配と村落間の物々交換を介した社会関係によって維持されてきた様子が詳細に描かれる。島内に交換を限定することによって鯨肉の価値を保持しようとする戦略は、地域通貨を通じて身体と自然の関係を再生しようとする取組にも大いに示唆するところがあろう。第3章「米を食べる：明治後期日本の都市社会」(遠城)では舞台を近代日本の都市に移し、主食である米の消費・流通を題材として食と身体の関係を考察する。もっぱら食の消費者である都市住民が、何をいかに摂取するかは食を供給し統制する諸力に大きく左右されることにな

る。ここでは生活難の状況におかれながら国産米に執着する都市貧困層と、国民の統制・組織化を企てる政府側の試みが細部にわたり明らかにされる。

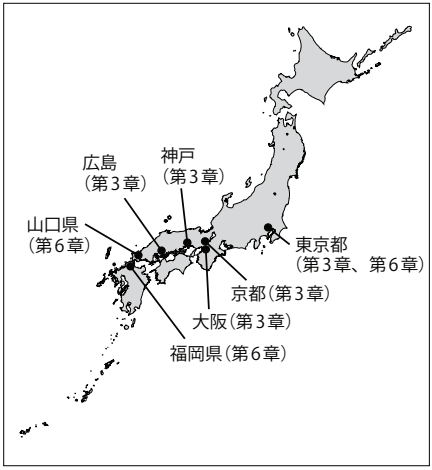
第Ⅱ部「身体に刻まれた文化」は、進化のプロセスで形成された身体と文化・社会とのかかわりを扱う。様々な動物と同様にヒトの身体には地域集団間の変異があり、これには局所的な環境における生活のなかで形成された適応形質も含まれる。第4章と第5章は、島嶼や高所といった地域の自然環境のなかで適応形質として身体を形成してきた遺伝的素因が、現代社会でいかにふるまうのかを示している。第4章「トンガ人の肥満」(稲岡)では大洋州島嶼に特徴的にみられる肥満を、遺伝的素因に加え、食生活や労働、身体観から多面的に考察している。第5章「チベットに暮らす人々の老いと高所環境」(坂本)では、標高3,000m以上の高地に生きるチベットの人々を事例に、低酸素環境において優位性を持つとされる遺伝子が、一方では老化や糖尿病を引き起こす可能性を指摘する。これらの論考では、身体適応を作り出した長い時間に比べて、交通や食品流通の発達といった社会環境の変化があまりに急速であることが改めて認識される。第6章「古人骨から過去の生業形態を読む」(米元)では近年発達してきた古人骨の生活痕跡分析の手法を用いて、中・近世日本の生業の解明を試みる。古人骨に残る痕跡や微量元素の新たな分析手法は過去の人類の生業や食生活について多くの知見をもたらしており、ヒト以外の霊長類研究の成果と合わせて、人類の環境適応への理解を大きく進展させている。この論考ではそうした研究の一端に触れることができよう。

第Ⅲ部「成長・リプロダクションと生活史」は、ヒトがその生涯のなかで特定の時期に経験する成長・結婚・出産といったイベントやプロセスを取り扱う。成長、結婚、出産、育児といった個々のライフイベントは、互いに独立しているわけではなく、生涯全体の設計のなかで互いに関連づけられ、影響し合っている。第7章「森棲みの焼畑民が大人になるまで」(佐藤)は、エチオピア低地の森で焼畑・狩猟採集を行うマジャンギルの成長と結婚を取り上げ、移動生活を行ってきたマジャンギルの低出生力が、彼らの子ども期・青年期における生業技術や知識の獲得プロセスの帰結である可能性を、生活史と出生に関するデータに基づいて指摘する。一方、ヒトの生涯のなかで最も若い時期にあたる乳幼児期・子ども期に焦点をあて、第8章「ポスト狩猟採集社会と子どもの社



（各章で言及する主なテーマ）

第Ⅰ部　食と生存
　第1章　自然を取り込む
　第2章　クジラをめぐる交換経済と食文化
　第3章　米を食べる
第Ⅱ部　身体に刻まれた文化
　第4章　トンガ人の肥満
　第5章　チベットに暮らす人々の老いと高所環境
　第6章　古人骨から過去の生業形態を読む
第Ⅲ部　成長・リプロダクションと生活史
　第7章　森棲みの焼畑民が大人になるまで
　第8章　ポスト狩猟採集社会と子どもの社会化
　第9章　ソンガイ・ザルマの女性にとって産むということ
第Ⅳ部　世帯人口・分業と環境利用
　第10章　世帯ライフサイクルと漁場利用
　第11章　身体・知識と資源利用
　第12章　女性の役割と生業戦略の変容



本書で取り上げたテーマと地域

会化」（高田）は、定住化によって大きな社会変容を経験したナミビアの狩猟採集民サンが、その生存環境の変容によって子どもの社会化にかかわる様々な特徴をどのように再編するのかを検討する。高田によって提起される、従来想定されていた適応論モデルで説明できないいくつもの指摘・発見を受け、狩猟採集民研究のなかでも子どもにかかわる研究は意外にも立ち遅れており、将来検討されるべき課題がいかに多いかを我々は知ることになる。第9章「ソンガイ・

ザルマの女性にとって産むということ」(堀井)は一転して、産む側である女性の視点から、ニジェールの農耕民ザルマの女性にとって子どもを産むことの意味を、女性の生涯と、女性の生きる場である家族・社会との関係において考察する。そこでは、父系・夫方居住で一夫多妻を認める社会に生きるザルマの女性にとって、厳しい環境下で子どもを産むことが自らの地位にかかわることである現実が浮き彫りにされるとともに、そのような社会関係のなかにあってしたたかに妊娠・出産のコントロールを試みる女性たちの姿が明らかにされる。

第Ⅳ部「世帯人口・分業と環境利用」では世帯の労働力や性別分業と環境利用の関係に焦点を当てる。食事をともにし、子育てをおこなう世帯は、各人員の成長とともにその労働や分業の様式も変えていく。第10章「世帯ライフサイクルと漁場利用」(池口)はこうした世帯労働力の周期的変化、すなわち世帯ライフサイクルが農業、あるいは環境利用をいかに変化させるかを、労働と生物資源の市場化が進むメコン川流域の集落を事例に検討している。世帯内分業には様々なやり方があるが、最もよく研究されているのは性別分業であろう。第11章「身体・知識と資源利用」(小谷)は生態人類学の立場から、生産性極大化をモデルとする従来の理解に、性別分業の象徴的側面を接合する重要性を指摘する。ここでは、ニューギニア高地に暮らす人々を事例にして、栄養摂取や労働の定量的分析をおこなったうえで、環境に関する知識や「物語」と性別分業の関係を考察している。第12章「女性の役割と生業戦略の変容」(中臺)は、スロバキアとの国境に近いポーランドの山村における生業と性別分業を明らかにする。度重なる戦争によりインフラ整備が滞ってきたこの地域では、1989年の市場経済導入後の産業化、観光化が女性労働の位置づけを大きく変化させている。個性ある食料生産や信仰儀礼の中心となってきた女性が今後地域をどのように担うのかは、市場から離れた山村の文化資源に関心をもつものにとって共通の関心事である。

以上のように、本書の各章は生物としてのヒトという側面に着目しながら、地域の自然・社会環境のなかで形成される多様な生きざまを考察している。取り扱う地域はアジア・オセアニア、ヨーロッパ、アフリカまでを含み、読者は改めてヒトに共通する人生の局面が、非常に可塑性に富んだものであることを認識するだろう。これらヒトの生存の文化生態を明らかにするうえで、地理学

や人類学が得意とするフィールドワークの重要性や、その方法の課題についても考える素材を提供しているのではないだろうか。本書がこの分野への関心を喚起し、より多くの研究を生み出す契機となれば幸いである。

（池口明子・佐藤廉也）

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻

身体と生存の文化生態

目　　次

本文中で☞印を付した用語には巻末
「索引・用語解説」に解説を付した。

シリーズ刊行趣旨……1
はじめに……2

序章　人類の生存環境と文化生態……（池口明子・佐藤廉也）13
0.1　身体と行動の生物―文化的理解……13
0.2　食と生存……20
0.3　身体に刻まれた適応の歴史……27
0.4　成長・リプロダクションとヒトの生活史……31
0.5　世帯人口・分業と環境利用……40
0.6　本書の研究視点……48

第Ⅰ部　食と生存……59

第1章　自然を取り込む：日誌法によるラオス3地域の野生食物摂取の比較
……（野中健一・小野映介・夏原和美・村山伸子）61
1.1　はじめに：食と健康を村落レベルの視点からとらえるために……61
1.2　データの取得：日誌法による食物摂取の把握……64
1.3　野生動植物食用の実態……71
1.4　検　　討……76
1.5　今後の課題……79

第2章　インドネシア、ラマレラのクジラをめぐる交換経済と食文化
……（江上幹幸）83
2.1　はじめに……83
2.2　近代化と社会・経済システムの変化……85
2.3　移住の歴史と伝承にみられる贈与・交換……87
2.4　物々交換による共生的関係……89
2.5　クジラと食生活……100
2.6　おわりに……111

第３章　米を食べる：明治後期日本の都市社会……（遠城明雄）115
3.1　はじめに……115
3.2　「生活難」に直面した都市社会……118
3.3　米と社会的身体……128
3.4　おわりに……135

第Ⅱ部　身体に刻まれた文化……139

第４章　トンガ人の肥満……（稲岡　司）141
4.1　はじめに……141
4.2　太平洋・トンガ・トンガ人……141
4.3　肥満の成因……145
4.4　トンガ人はいつから太ってきたか？（食物摂取や活動・労働の変化）……148
4.5　遺伝的検討……153
4.6　肥満をどう考えるか？（ボディーイメージ）……154
4.7　肥満との戦い……156

第５章　チベットに暮らす人々の老いと高所環境……（坂本龍太）161
5.1　はじめに……161
5.2　人体にとっての低酸素……162
5.3　青海省高齢者健診……164
5.4　チベット人における適応と老化の関連についての仮説……168
5.5　変わりゆく世界の中で……172
5.6　おわりに……173

第６章　古人骨から過去の生業形態を読む……（米元史織）177
6.1　はじめに……177
6.2　筋骨格ストレスマーカーに関する研究……178
6.3　MSMs を用いた生業変化に関する研究……180
6.4　MSMs を用いた生業復元：漁撈民……181

6.5　日本の中世漁撈民……182
6.6　MSMs を用いた生業復元 : 江戸時代の武士……189
6.7　おわりに……198

第Ⅲ部　成長・リプロダクションと生活史 …… 201

第７章　森棲みの焼畑民が大人になるまで：エチオピア森林焼畑民の生業と生活史……（佐藤廉也）203
7.1　ヒトの生涯と成長・結婚・出産……203
7.2　マジャンギルの生業と生涯……206
7.3　子供期から青年期にかけての成長と学習……209
7.4　結婚の諸相と出生力……215
7.5　焼畑民の生活史における成長と出生力……221

第８章　ポスト狩猟採集社会と子どもの社会化……（高田　明）225
8.1　問　　題……225
8.2　目的と方法……230
8.3　クンを社会化する環境の変遷……232
8.4　資源としての環境……245

第９章　ソンガイ・ザルマの女性にとって産むということ：ニジェールの一農村におけるエスノグラフィー……（堀井聡子）251
9.1　はじめに……251
9.2　方　　法……252
9.3　対象地域の概要……253
9.4　大家族における存在価値の証明……258
9.5　アルベーリになるための条件……263
9.6　女性にとって産むということ……272
9.7　妊娠・出産行動に投影される産むことの意味……275

第Ⅳ部　世帯人口・分業と環境利用 279

第 10 章　世帯ライフサイクルと漁場利用：ラオス・メコン川流域の天水田集落を事例に ..... （池口明子）281
10.1　はじめに 281
10.2　世帯人口と資源利用：チャヤノフ小農論の環境論的展開 282
10.3　メコン川流域における天水田集落の立地環境 284
10.4　世帯構造と労働力 286
10.5　漁場・漁具・漁法 294
10.6　世帯ライフサイクルと湿地の重層的利用：おわりにかえて 306

第 11 章　身体・知識と資源利用：パプアニューギニア・ボサビにおける性別分業の事例から ..... （小谷真吾）311
11.1　「悲しみ」を競う人々 311
11.2　知識と性別分業 313
11.3　ボサビの概要 315
11.4　ボサビにおける生業 320
11.5　性別分業の概観 324
11.6　性別分業の定量 325
11.7　性別分業の構築性 331
11.8　システムの接合点としての性別分業 334

第 12 章　女性の役割と生業戦略の変容：ポーランド・カルパチア地域の山地集落を事例に ..... （中臺由佳里）339
12.1　はじめに 339
12.2　生業とその担い手 347
12.3　自然信仰と生活の中での女性の位置 354
12.4　時代の変化と女性の役割 361

索引・用語解説 364

序　章

人類の生存環境と文化生態

0.1　身体と行動の生物ー文化的理解

0.1.1　ヒトの多様性と文化

1954年に米国政府に設立された「平和のための食糧Food for Peace」は、米国で最大規模の食糧援助機関である。この機関は150カ国以上に直接、食糧を無料で提供したが、そのうち最も多くの地域に供給されたのは多額の補助金を受けて生産された粉ミルクだった。特に1970年代、干ばつや内戦が深刻化したサハラ以南アフリカでは、乳幼児だけではなく、成人にも支給されたが、これは牛乳がすべての人間にとって栄養に富む完全食だというヨーロッパ的な認識に基づいていた。しかし、粉ミルクを飲んだ人々は腹痛や下痢を訴え、かえって栄養不足を起こすことも多く、批判を浴びることになった(Durham 1991)。

粉ミルクを飲んだ人々が下痢をおこした主要な原因は、乳糖不耐症である。乳糖は消化器官で吸収されにくく、残った乳糖は腸内でバクテリア分解されてガスを発生し、腹痛や下痢を起こす。人間の母乳には乳糖が多く含まれるが、乳児はそれを分解する酵素であるラクターゼを腸内にもち、吸収されやすいガラクトースやグルコースに変えることができる。このラクターゼは離乳とともに合成されなくなるが、欧米の集団では成人になってもラクターゼを維持していることが多い。成人がラクターゼを作る機能は遺伝的に与えられ、地域集団によってその遺伝子頻度には差異がある。

地理学者フレデリック・シムーンズは、世界の197集団における成人の乳糖吸収の頻度を比較検討し、それらを生業に応じて7つのカテゴリーに分けた。その結果から、乳糖不耐症は病気や摂食障害ではなく、過去に長い牧畜の歴

このプレビューでは表示されない頁があります。

第1章

自然を取り込む

日誌法によるラオス3地域の野生食物摂取の比較

1.1　はじめに：食と健康を村落レベルの視点からとらえるために

ヒトの健康は栄養摂取状況からとらえることができる。それは固定されたものではなく、時代や地域によって異なっている。この差異を段階的な変化過程としてとらえる見方として☞栄養転換という概念がある。この差異は、第1段階：食物を狩猟採集で得る、第2段階：慢性的な飢餓、第3段階：飢餓が緩む、第4段階：慢性疾患多発、第5段階：健康的に行動変容（肥満の減少）のように示されている（Popkin 2006; 村山ほか 2008）。そこでは、世界の栄養転換の段階は、高所得国は第4段階に、低中所得国では第3段階から第4段階に移行しているとされ、高所得国と低所得国ともに肥満者が増加している。さらに近年は、肥満者は低所得層や農村でより増加する方向に移行していることが指摘されている。また、低所得国における肥満の直接的な要因には、食事、身体活動量、遺伝（代謝や適応に関する）、胎児や乳幼児のときの低栄養などがあるが、その社会経済的な環境因子として、所得の影響や、グローバリゼーションのもとで、肉などの食物価格が低下したためスーパーマーケットなどでのアクセスが増加したこと、ファーストフードやソフトドリンクの販売増加などが要因としてあげられている（Popkin 2006）。

ヒトの健康形成は、生活環境、住民の活動、食物入手という地域と健康の相互関連、すなわち、地理学的な自然と社会の相互関係のひとつとしてとらえられよう。そして地域の環境、生業活動の変化に伴い食物入手の方法、それにより得られる食物の種類は変わる。この結果として食事が変化し、栄養素の摂取も変わってくる。

筆者らはこれまでインドシナ半島内陸部に位置するラオスの村落（**図1-1**）を

このプレビューでは表示されない頁があります。

第2章

インドネシア、ラマレラのクジラをめぐる交換経済と食文化

2.1　はじめに

インドネシアのバリ島より東に連なる小スンダ列島、その東に位置するレンバタ島は沖縄本島よりやや大きい島であり、火山をいただいた島の住民の伝統的生業は焼畑耕作によるトウモロコシ・陸稲栽培である。その南海岸にマッコウクジラを捕獲して生計を営むラマレラの民がいる。かれらは全長10ｍのプレダン（*peledang*）とよばれる木造帆船を用いて、手投げ銛（離頭銛）でマッコウクジラを捕獲し、それを媒介として山の民との物々交換が成立する経済システムを維持している。クジラ肉を媒介とした山民との共生関係は400年の歴史を持ち、共生的な経済システムが成り立つことにより、ラマレラの民は生き続けることができると筆者は考えている。筆者が規定する《ラマレラ捕鯨文化》はラマレラ捕鯨と物々交換による地域社会の共生関係を示している（**図2-1**）（江

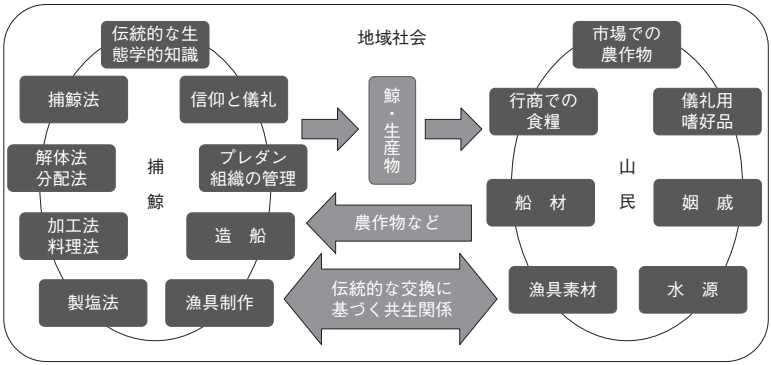


図2-1　≪ラマレラ捕鯨文化≫概念図（江上・小島 2012による）

このプレビューでは表示されない頁があります。

第3章

米を食べる

明治後期日本の都市社会

3.1　はじめに

人間は個人あるいは集団で自然に働きかけることによって、自らにとって必要な物を作り出してきたが、この長い歴史的過程を通して、人間は自然を改編すると同時に、自らの内なる自然である身体と社会的諸関係も作り変えてきた。こうして生産された「社会的自然」は、「第二の自然」(Lefevbre 1973)あるいは「建造環境built environment」(ハーヴェイ 1991)と呼ばれるが、第一と第二の自然を区別することがもはや容易でないほど、人間と自然の相互関係は様々な矛盾を内包しながら複雑化してきたといえるだろう。

それでは、人間と自然の交互過程と社会的分業から生れた近現代都市とそこで生活する人々の身体は、どのように理解できるだろうか。ここではE.グロスズ(Grosz 1995)やD.ハーヴェイ(Harvey 1995, 2000b)の議論を手がかりにして、この問題に接近することにしたい。

グロスズ(1995)によると、これまでの都市と身体の相互関係の研究は、主に次の二つのモデルに依拠していたという。第一は、万物の尺度としての身体という考え方から、都市を身体の反映あるいは投射とする立場である。第二は、都市と身体をアナロジーとして理解するもので、身体と社会的秩序、身体と統治体(国家や都市)／☞身体政治body politicsを対応させる立場である。たとえば、カントロヴィッチの「王の二つの身体」はこのアナロジーに依拠しており、君主の公的・政治的身体は、私的利害による恣意や失敗、そして死に至る個人的身体から想像的境界によって区別されることで、相対的な永続性を維持できるようになった。近代以降、ナショナリズムや「民主化」によって、統治体を表象・代表する身体像が変化し、また二つの身体(私的領域と公的領域)の関係も

このプレビューでは表示されない頁があります。

第4章

トンガ人の肥満

4.1　はじめに

本章の目的は、オセアニアで近年問題となっている肥満について、トンガ(王国)を例にとり、その現状と成因、そして肥満に対するトンガ人の対応について記述することにある。このレビューでは、筆者によるデータばかりでなく、様々な文献データ・資料を用いるが、その中で、トンガ人の肥満というものが、長いヒトの移動の歴史の中で定着した遺伝的素因のみならず、食物摂取や労働・活動といった環境要因、さらには風土や社会文化と言ったもので形成されたことが理解されよう。同時にこの遺伝的素因は、ポリネシア人だけでなく日本人(縄文人)も持っている可能性が高いことも示唆される。時間をかけて作られた肥満を一朝一夕に解消することは至難の業かも知れないが、肥満がヒトの健康を阻害し、その生存を脅かしているのも事実である。

4.2　太平洋・トンガ・トンガ人

現在のトンガ王国(The Kingdom of Tonga)(**図4-1**)通称トンガは、南太平洋に南北600 km、東西200 kmの幅に広がる4つの群島、172の島群(45島が有人)からなる人口約10万人の小国家(人口の約7割が首都ヌクアロファのある最南部のトンガタプ島に居住)で、オセアニアの中でポリネシアに属し、サモアの南、フィジーの東に位置する。国土の東側にトンガ海溝が南北に伸びており、ここでは東の南太平洋プレートが西のインドプレートに潜り込んでいるため、トンガは基本的には火山群島となっている。西側の島の方が新しく、東側の島は火山島が沈下したことによるサンゴ礁から形成されている。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第5章

チベットに暮らす人々の老いと高所環境

5.1　はじめに

はじめて高地に行ったのは学生時代、東北大学のカリキュラムの一環で訪問したボリビアだった。高度順化のためもあり標高約400 mのサンタクルスから自動車で2日かけて標高約2,600 mのコチャバンバを経由して標高約3,600 mのラパスに到着した。車内では頭重感以外に特に症状はなかったがラパスで車から降り、ホテルの階段を上ろうとすると、息切れがした。夕食時にレストランで赤ワインを数杯飲んだだけで視界が暗くなり、重く感じる体でヨタヨタと歩きながら何とか部屋まで戻りそのままベッドに倒れこんだのを記憶している。1日当たりに移動する標高差が大きかったこと、到着してすぐに飲酒をしたことが相まって急性高山病に罹った可能性も考えられるが、薬の服用はせずに就寝し、幸い翌日に症状は悪化せず改善していたため下山せず、ホテルで温かいコカ茶を飲み、数日で症状は消えた。坂道を歩くだけで息切れをしている私の隣で、低酸素をものともせずに動き回る人々に驚きを覚えはしたが、その7年ほど後にまさか☞高所医学に関わる研究をすることになろうとは当時は思いもしなかった。

本章では、まず、高所の重要な特徴の一つである低酸素の人体への影響を概説し、青海省の省都西寧から北西30 kmほどの所に位置する標高3,000～3,200 mほどの海晏県という所で行った調査の結果を示したい。そして、その上で、チベット人の身体の中で世代を超えて培われてきた低酸素への適応法が老化と関連しているのではないか、という仮説を提示したい。チベット人の低酸素への適応法は優れた点ばかりが強調されてきたように思うが、その適応法はある面で老化を促進しうるのではないか、という説である。老化の促進とい

このプレビューでは表示されない頁があります。

第6章

古人骨から過去の生業形態を読む

6.1　はじめに

遺跡から出土した古人骨から、先史古代人の生活スタイル、つまり当時の人々が日々どのように生活し、何を食べ、どのような健康状態で暮らしていたか、を明らかにしようという試みは、これまで数多くの研究者によってなされてきた(Kelly and Angel 1987; Kennedy1989; Larsen1997; 米田ほか 2011 等)。

骨に残る生活痕跡としてよく知られるのは足首に現れる関節面、蹲踞面(**図6-1**)である。腰を浮かせて踵を地面につけたまま体を支えるという独特の姿勢によって足首が強く持続的に屈曲させられた結果、後天的に形成された特殊な関節面だと考えられ、縄文時代人にきわめて多くみられる傾向があると指摘されている(馬場 1970; 片山 1990)。このように当人の生存中に長期・継続的に行っていた行為は骨に刻み込まれている。これは、偏った力が特定部位に加わり続け、その力に対して骨が適応的に変化した(骨の機能適応モデル)結果であると考えられている。この他にも、骨に残される生活痕跡は数多く研究・報告され

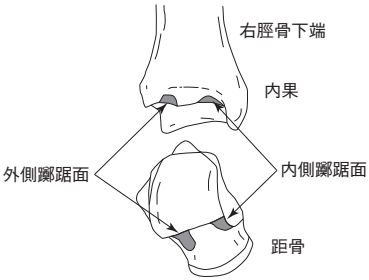


図6-1　右側の足首にあらわれる蹲踞面
(土肥 1996 による)

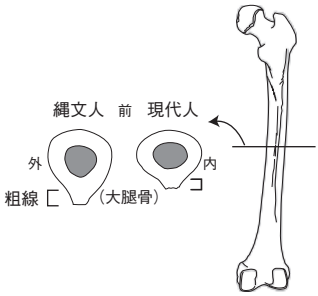


図6-2　大腿骨の断面形
(中橋 2005 による)

このプレビューでは表示されない頁があります。

第7章

森棲みの焼畑民が大人になるまで

エチオピア森林焼畑民の生業と生活史

7.1　ヒトの生涯と成長・結婚・出産

ヒトの生涯はどのように設計されているのだろうか。私たちの生涯はどこまで普遍性があり、一方で環境の違いによる多様性はどこまで存在するのだろうか。そしてヒトの生涯において、子供から大人への成長のプロセスと、結婚すること、子供を産み育てることはどこまで関連づけられているのだろうか。本章の問題意識はそのような疑問から出発している。

現存の霊長類の中で、ヒトは最も大きな大脳を持つ生物である。大きな大脳を持つことにより、ヒトは複雑な言語の操作が可能になった。このことによって、生業技術をはじめ生きるために蓄積された様々な知識を文化として次世代へ伝えることができるようになるとともに、血縁者を超えて他者と協力して社会生活を送ることが可能となり、さらに複雑な技術の蓄積・伝達が可能になった。大きな脳を持つことが人間の文化の発達と文明の繁栄を可能にしたことに異論を持つ人はいないだろう。

しかし、大きな大脳を持つことは良いことばかりではないはずである。例えば、大脳は基礎代謝量の点からみればきわめて燃費の悪い器官であり、狩猟採集社会の採食活動が不安定なことを考えれば、大きな大脳を持つことによって餓死や栄養不良のリスクを高めることになったかもしれない。また、大きな頭を持って生まれてくることによって、出生時の自らの死亡リスクを高めるだけでなく、出産を原因とする母体の死亡率を高めることにもなっただろう。

一方、複雑な言語や文化の習得が生存維持にとって必須事項になったため、ヒトは大人になるまでの長い言語・文化の習得期間を必要とすることにもなった。通常、霊長類は離乳すると自ら採食活動をするようになるが、ヒトの子供

このプレビューでは表示されない頁があります。

第8章

ポスト狩猟採集社会と子どもの社会化

8.1 問　　題

8.1.1 狩猟採集社会と子ども

この論文の主要な目的は、ポスト狩猟採集社会における環境の変化に伴って子どもの社会化における特徴がどう再編されるのか、私が調査地としてきたナミビア北中部に住むクン・サンの事例に基づいて論じることである。狩猟採集社会の社会変容についてはこれまで多くの優れた研究が公表されてきた(e.g., Hitchcock *et al.* 2006)。しかしながら、その中に子どもの社会化に関わる研究はごくわずかしかない(例外として、Hewlett and Lamb(2005)など)。1990年代以降、子どもについての人類学的な研究が激増するとともに、新たな理論的関心のもとに研究プロジェクトの再組織化が進んでいる(高田2009)。狩猟採集社会と子どもの社会化の関係についても、こうした情勢を受けた新たな議論の展開が求められている。以下ではまず、本研究の目的との関連で重要となる狩猟採集社会、とくに南部アフリカのサンにおける子どもの社会化についての先行研究を概観しよう。

サンは多くの地域集団・言語集団からなり、南部アフリカ一帯の先住民だとされる。西欧社会には、サンは古くから「ブッシュマン」として知られていた。20世紀の後半になると、参与観察に基づく人類学的な調査を行い、サンの生活実態を明らかにしようとする研究者が現れるようになった。とりわけ影響力が大きかったのは、気鋭の人類学者リチャード・リー(Richard Lee)に率いられたハーバード大学を拠点とする調査隊である。彼らはまず、人類社会がその歴史のほとんどの間、狩猟採集活動に生計の基盤をおいていたという知見に基づいて、現代の狩猟採集民であるサンが人類社会の始原的な姿を復元する鍵にな

このプレビューでは表示されない頁があります。

第9章

ソンガイ・ザルマの女性にとって産むということ

ニジェールの一農村におけるエスノグラフィー

9.1　はじめに

毎年35万人を超える女性が、治療や予防が可能な妊娠や出産に関連した合併症で命を落としている。そしてその多くは、サハラ以南のアフリカ（以下、サブサハラとする）と南アジアで発生している（Hogan *et al.* 2010）。ミレニアム開発目標達成期限まで残りわずかとなった今、国際社会は母子保健向上のためのイニシアチブを打ち出し、サブサハラなどの妊産婦死亡の低減に向けて取り組みを加速化させている（The Lancet 2010; Government of Canada 2010）が、遅々として状況は改善しない。

サブサハラに位置するニジェール共和国（以下、ニジェールとする）は、妊産婦死亡率が820（出生10万対、調整値）と世界でも最も高い国の一つである（UNICEF 2009）。2006年にニジェールで実施された人口統計調査（Institut National de la Statistique（INS）2007）によれば、同国の妊産婦死亡の高さには、女性が多産傾向にあることや、介助者を伴わない分娩、妊産婦健診の未受診者の多さ、間隔をおかない妊娠や若年妊娠などの、出産に関する行動様式の影響があるとされる。このため、ニジェールでは、母親および乳幼児の死亡率減少を最終的な目標とする「保健医療開発計画（2005年～2009年）」を策定し、そのなかで妊産婦健診や家族計画サービスの無償化など、リプロダクティブヘルス活動の強化に取り組んできた（Ministère de la santé publique Niger（MSP）2005）。しかし、現在も、とくに、都市部よりも農村部において、自宅分娩の割合や、妊産婦健診の未受診率が高い傾向があり、状況は改善していない（INS 2007）。前出の人口統計調査（INS 2007）では、農村部では都市部と比較し、避妊具など保健医療サービスへのアクセスが制限されていること、また女性の就学率や就

このプレビューでは表示されない頁があります。

第10章

世帯ライフサイクルと漁場利用

ラオス・メコン川流域の天水田集落を事例に

10.1　はじめに

河川や湖沼などの水域は様々な生物の生息域であり、これらは地域の人びとにとって重要な資源として利用されている。水域は地形や堆積物、降水量変動や植生などの影響を受けて異なる生態系から構成されており、これら異なる水域がいかに利用され、人びとにとってどのような意味をもつのかは、自然と社会の関係を探るうえで興味深いテーマの１つである。

本章でとりあげるメコン川は東南アジア最大の河川であり、流域社会による資源利用の意義や変化は重要な研究課題とされている。この流域では、上流に位置する中国の経済成長やダム開発、都市化や農業の近代化が与える影響などが取り上げられてきた。その多くは流域や国家といった広い空間単位を扱っており、人びとの具体的な活動がみえるものは少ない。より小さな地域社会に着目した研究として、集落の経済階層に着目して水域資源利用への依存度を示すものがあるものの、この方法では水域環境や魚類などの生物を均一な集合としてとらえがちである、という限界を抱えている。

本章の目的は、世帯人口に着目して環境利用の動態をとらえるアプローチを整理し、漁場利用研究への適用を試みることである。以下ではまず、世帯ライフサイクル研究と環境利用への適用可能性について理論的に検討する。続いてメコン川流域に位置するラオス・ヴィエンチャン平野の一集落を事例として、生業と世帯人口とのかかわりを具体的に考察する。最後に、こうしたアプローチがメコン川流域の開発論に与える含意について述べたい。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第11章

身体・知識と資源利用

パプアニューギニア・ボサビにおける性別分業の事例から

11.1 「悲しみ」を競う人々

筆者がフィールドワークを行っているパプアニューギニア、ボサビの人々について、ギサロと呼ばれる演劇を描いた民族誌がある。文化人類学者シェフェリンが1960年代に行った調査をもとに記したその民族誌には(Schieffelin 1976)、共同体同士の公的な会合(婚約、同盟、休戦等)におけるギサロの詳細が描かれている。ギサロの舞台は、後述するロングハウス屋内の広間であり、作詞者、編曲者、演者は全て男性である。その時に歌われる内容は、観客に縁のある故人の思い出であり、観客の人々をいかに「悲しませる」かが目的とされている。

ギサロの歌詞、メロディー、振り付けは、出席者の状況や物語を踏まえて作られる。優れた作詞者、編曲者、演者は、たびたびギサロの場面に招待されるし、ギサロの後、後を慕って来る娘達が引きも切らない。ただし、その演劇に対する評価は、驚くべきことに「悲しんだ」観客が演者に対して燃え盛る松明を押し付けることで下される。演者は当然やけどを負うわけだが、そのやけどの跡の数が高い評価を受け続けていることの証であり、本人にとっての誇りである。「悲しんだ」観客が演者を傷害することにおける心の動きは筆者にとっても未知のものであるが、人々の考えを聞くと、「悲しみを感じさせられたことで負けたような、故人を奪われたような気持ちになり、それを補償するために演者を焼くのだ。」ということらしい。娯楽としてならば、楽しい演劇で会合を和ませたほうが共同体同士の会合としてしかるべきだと感じるのだが、ボサビの人々にとって共同体は本質的に競い合うものであり、それは娯楽においても同じなのである。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第12章

女性の役割と生業戦略の変容

ポーランド・カルパチア地域の山地集落を事例に

本章は、ポーランド・カルパチア地域での森林資源の利用を基盤とした生業戦略を、女性の役割の変容とともに論じようとするものである。ポーランドは1989年の資本主義への転換以降2004年のEU加盟と共に大きな社会変化を図ってきた。しかし急速な資本主義化に同調できる都市部とは異なり、社会基盤が未整備な農村地域では多くの地域が個人の資質と経済力により様々な方法を模索しなければならず、地域開発が大きな課題である。また、変転する支配者たちからの抑圧の中、ポーランド人を精神的に支えてきたのは宗教であるといわれてきた。しかし敬虔なローマ・カソリック教徒が国民の90％以上を占めるポーランドで公的にキリスト教が受容されたのは10世紀半ば以降であり、他のEU諸国と比較して遅い改宗であった。しかも都市からの遠隔地である山地域での普及はなかなか及ばす、現在でも樹木信仰や大地崇拝といった自然崇拝の継承が宗教行事の中にみられる。このような宗教行事の中で女性が果たす役割は重要であったが、父系社会にあって女性は常に男性の補助的な役割を担い続けていた。近年、地域が自立を模索する中で女性はどのように生業戦略に関わり、そして変化しているのか。本章では、マウォポルスカ(Małopolska)県ザボヤ(Zawoja)村B集落を事例に導き出そうとするものである。

12.1　はじめに

この章ではまず、ポーランド・カルパチア地域の位置と自然環境を傍観する。ヨーロッパの地形は、古期山地、新期山地、卓状地(ほぼ水平な地層からなる構造平野)に大別されるといわれ、東ヨーロッパ北部の低地には、氷期の痕跡が明瞭に残された特徴的な地形がみられる(森 2007)。**図12-1**のようにポーラン

このプレビューでは表示されない頁があります。

索引・用語解説

略　語

BMI（肥満指数）／77, 145
BMR（基礎代謝率）／320
C/W（消費力/労働力）比率／282
MSMs（筋骨格ストレスマーカー）／178
ROS（活性酸素種）／165

あ　行

アクター・ベイスド・モデル／16, 313　オーラヴ（B. S. Orlove）が1980年の*Annual Review of Anthropology*誌上で生態人類学の歴史と展望をレビューした際に取り上げた理論（Orlove 1980）の一つ。それまでのシステム理論と視点を変え、個人の意思決定から生存戦略、再生産戦略を分析した上で、集団の集合的な戦略の構築性を捉え直そうという理論である。［小谷］

イスラム教徒／253
一夫多妻／39, 217, 271
遺伝／61
　――決定論／18
　――的素因／141
移動農耕／320

雨季／68
牛／234
ウマ／352

栄養摂取／48, 65
栄養素／61
栄養転換／61　栄養転換（nutrition transition）は、1993年にバリー・ポプキン（Barry Popkin）によって提起され、歴史的に食事や身体活動の変化によって栄養状態や栄養関連の疾病の変化が段階的におこることをさし、人口転換や疫学転換と関連しているとされる。第一段階：食物を狩猟採集で得る、第二段階：慢性的な飢餓、第三段階：飢餓の減少、第四段階：過剰栄養による慢性疾患多発、第五段階：健康的に行動変容（肥満の減少）とされる。［村山］
エコ・ツーリズム／47, 361　地域外から人や知識、資金などを導入することにより、地域特有の資源を保全・継承しながら、地域づくりを実現する観光の一つの形態。地域の資源は有形なもの（景観や生物多様性など）や無形なもの（伝統文化や歴史など）により構成される。地域住民も自分たちの資源を再確認することで地域の価値を発掘し継続する意欲を持ち、地域の発展を図ることができる。また次世代の環境教育の場として活用する社会システム機能をも持つ。［中臺］
エスニシティ／231
江戸時代／189
エネルギー収支仮説／36
エネルギー摂取量／63, 149, 320

か　行

外国米／129
海獣漁／182
解放運動／229
核家族／286, 322
学習期間／36
拡大家族世帯／286
鍛冶／88
家族計画／266　WHOの定義によれば「自分たちが望む子ども数や出産間隔を決定し、避妊具の使用や不妊治療などによってそれらを調整すること」を指す。また、避妊法は「近代的避妊法」と「伝統的避妊法」に区別されることがあり、不妊手術、子宮内避妊具（intrauterine device; IUD）、ホルモン法（経口ピル、注射、埋

このプレビューでは表示されない頁があります。

● **編　者** ①現職、②学位、③専門分野・研究対象、④著書・論文

池口 明子 (IKEGUCHI Akiko)

①横浜国立大学教育人間科学部 准教授、②博士(地理学)、③地理学・文化生態学、④『漁業，魚，海をとおしてみつめる地域』(共著、冬弓舎、2013)、『歴史と環境』(共著、花書院、2012)、『人と魚の自然誌』(共著、世界思想社、2008)、『メコンの世界』(共著、弘文堂、2007)ほか。

佐藤 廉也 (SATO Ren'ya)

①九州大学大学院比較社会文化研究院 准教授、②博士(文学)、③地理学・文化生態学、④『朝倉世界地理講座　アフリカ(I)(II)』(共編著、朝倉書店、2007・2008)、『グローバル化時代の人文地理学』(共著、放送大学教育振興会、2012)、『焼畑の環境学』(共著、思文閣出版、2011)、『イモとヒト――人類の生存を支えた根栽農耕』(共著、平凡社、2002)ほか。

Nature and Society Research Series, vol. 3

Cultural Ecology of Body and Subsistence

ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻

身体と生存の文化生態

発行日――――2014年5月28日　初版第1刷
定　　価――――カバーに表示してあります
編　　者――――池口明子
　　佐藤廉也
発行者――――宮内　久

海青社 Kaiseisha Press
〒520-0112　大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677　Fax (077) 577-2688
http://www.kaiseisha-press.ne.jp
郵便振替　01090-1-17991

● Copyright © 2014 ● ISBN978-4-86099-273-6 C3336 ● Printed in JAPAN
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。